

キャンヘルプタイランド

ネットワーク通信

2010年10月23日発行 第51号

バンコク便り

タイ・バンコク在住の西川会長から

バンコクを走る高架電車、「BTS」が1999年12月に開業してから、約10年が過ぎました。開業当時は「あんな値段の高い乗り物に乗るタイ人はいない」などと言われ、実際しばらくは乗客数も伸び悩んでいたようですが、利用者は年々増え続け2003年には黒字化し、現在の一日あたりの乗客数は開業当時の約3倍にもなったそうです。2004年に開通した地下鉄と合わせ、「BTS」はバンコク市民の通勤通学の足としてすっかり定着し、なくてはならないものになっています。

開業当初はいつ乗ってもがらんとしていたものですが、最近では朝夕のラッシュ時は常に満員で、日本のように無理やり乗り込もうとする人が少ないせいか、駅によっては積み残しが出るほどです。3両編成の車両ではそろそろ限界のようで、報道によると来年にも4両編成の車両がお見えすることになりそうです。

さて、かくいう私も毎日の通勤にBTSと地下鉄を使っているのですが、ここ数年それまでとは違った光景を車内や駅で見るが多くなりました。

まず、本を読むタイ人が増えたこと。以前は本を読んでいる人と言えば、日本人かガイドブックを読む観光客ぐらいで、駅近くで配られるチラシに目を通す人はいても、本を読むタイ人にはほとんどお目にかかることはなかったのですが、最近は電車の中で読むために本を持ち歩く人が増えてきたように思います。

次に携帯電話。タイでは電車内で携帯電話を使うことが迷惑行為だとは考えられておらず、以前から電車の中で会っても携帯電話を使っておしゃべりに興じる人は多かったのですが、最近はiPhoneやブラックベリーなどのいわゆるスマートフォンが流行していて、携帯電話代も月極めで使い放題の定額パケット料金が一般化してきたこともあり、通話ではなくネットに常時接続しながらメッセージをやり取りしあうというスタイルに変わりつつあります。以前は日本に一時帰国した際に乗る電車の中で、みなが揃って携帯電話の画面を見つめている光景に不気味さを感じたものですが、似たような光景がバンコクの電車の中でも見られるようになりました。

そして、エスカレーター。タイでは日本のようにエスカレーターの片側を空けておくという習慣がないのですが、私が毎日利用する地下鉄シーロム駅では朝のラッシュ時に限って、日本のように急ぐ人のために片側を空けておくという暗黙のルールができつつあります。都心に通うサラリーマンにとって、時間は一分一秒でも惜しいということなのでしょう。

このように、最近の電車にみるタイ人はどうも日本化しているように思えてなりません。まさかタイ人自身が日本を意識してそうしているとは思えませんが…。異文化を感じることなく、ストレスなく日常生活を送れるという意味では歓迎すべきなのかもしれません。しかし、日常の風景に見る日本との違いを見て、一人面白がっている私にとっては、最近のタイ人の日本化はなんだかつまらないような気がします。

西川

特集

～レイ先生からの手紙～



I was sweeping the front porch when Miyuki took this picture. We have been busy cleaning and unpacking the 69 boxes we sent. We bought a new car and will drive it to California for a wedding on July 31. Miyuki will learn to drive in the U. S. A. !

I retired the 31st of March and we moved to Athens, GA on 16 April. I apologize for being so late in sending our new address and thank you note. The reasons are that we stayed at my daughters house for a month and I was sick for about five weeks. Now I am OK. I really appreciate all your kindness while we were in Japan. I had a wonderful life there and I will never forget the days we shared with you.

We will be leasing a house here for a year. We can see deer, rabbits, and many birds in our back yard. Our new address is as below:
460 Brickleberry Ridge, Athens, GA 30605-5727 and our e-mail is: harrywray@att.net

Please take care of yourself. Fraternally, Harry & Miyuki

Dear Mr. Sensei, Thank you ever so much for the heart-warming C.A.N. PARTY and the wonderful memories. I was really impressed by the kind feelings of everyone. I really appreciate what you did for me. And now just as I am writing I realize that I forgot

I am standing in the back yard. Behind our yard is a forest. We found a big snake skin yesterday. The lawn area is too big, but the area is very green and quiet.



to write the article that you requested of me. I'm so sorry. Do you still want me to write it for you. 本当にごめんね。Fraternally yours, Harry & Miyuki

—訳文—

この写真を深雪が撮ってくれた時、私は正面玄関をほうきで掃いていました。私たちは掃除と日本から送った引越しダンボール 69 箱を開けるのにずっと忙しくしていました。そしてアメリカで新しく車を買ひ、7月31日には結婚式出席のためにカルフォルニアまでドライブします。深雪はアメリカで運転を学ぶでしょう！

私は3月31日に退職し、4月16日にジョージア州アテネに引っ越してきました。新しい住所とお礼状を出すのが遅れてしまいお詫び申し上げます。理由は引っ越してからしばらく娘の家に1ヶ月おり、それから私は5週間病気になりました。今はもう回復しています。私は日本での皆様のご親切に心から感謝しています。素晴らしい時間を日本で過ごせました。私はあなた方とともに過ごした時間を決して忘れることは無いでしょう。

1年間私たちはここで家を借りるつもりです。鹿やうさぎ、たくさんの鳥が裏庭から見えます。私達の新しい住所をお伝えします。

460 Brickleberry Ridge, Athens, Georgia 30605-5727 USA

Eメールアドレスは ;harrywray@att.net

お体に気をつけてお過ごし下さい。親愛なる皆様へ。

活動報告 1

～奨学金「すみれ基金」発足～

報告者 白柳 美穂

<発足の経緯>

昨年、キャンヘルプタイランドの会員の奥様から「従姉妹の女性が亡くなり家族もいなかったことから、『遺産の一部を慈善団体に寄付してほしい』と私たち二人が託されました。キャンヘルプタイランドで亡くなった従姉妹の意思が反映できるような寄付の使い道はありますか？」と運営委員がご相談を受けました。

亡くなられた女性は「向上心のある子どもにより高度な教育を。そして、いずれ地域や社会に貢献できる人になってほしい」というお考えをお持ちでした。

相談者とキャンヘルプタイランド、現地の教育制度や現状を良く知る現地スタッフ兼 FREE 財団代表者と幾度も話し合いを繰り返し、夢のある優秀な子どもたちを大学に進学させることを内容とした大学生特別奨学金として、故人の名前から冠を取って「すみれ基金」と名づけ発足させる事を「理事会」で決議いたしました。

<目的>

この「すみれ基金」の目的は、故人「すみれさん」のご意思を尊重すべく、大学生特別奨学金という内容でキャンヘルプタイランドと現地 FREE 財団との共同事業として行います。

そして、卒業後、奨学生たちが地域や社会に貢献できるよう、地域性、就職先なども踏まえ、学部を「教育学部」「農学部」「医療関係学部」の3つに指定するほか、支援期間中、様々なボランティア活動に参加する社会貢献制度も取り入れていきます。

単なる大学生特別奨学金としてだけではなく、将来への人材育成支援という意味も含まれている大変意義の



ある奨学金です。

<計画>

目的及び寄託された高額の寄付を、有効に活用するための計画を立案し実施します。

一年間の流れとしては、毎年3～6名選出し、短大、専門学校、大学進学希望者を対象とします。タイの短大は技術系であること、また専門的なことを学ぶ専門学校も社会貢献性という面から支援の対象としました。

募集の方法は、現地 FREE 財団のホームページでの告知や、継続奨学生や各大学機関への呼びかけを行い、11 月には FREE 事務所で申請書類を受付け、12 月初旬にインタビュー＆候補者を絞り、12 月～1 月にかけて、候補者を訪問します（FREE にて）。

そして、公平に選出を行うため、この度「選定委員会」を設けることになりました。

構成は、依頼者2名、キャンヘルプタイランド会長、奨学金プログラム担当者、FREE 財団代表者の計5名です。奨学生の最終的な選出は選定委員会にて2月に行う予定です。

4月末（早いところは1月末）には大学の合否発表がありますので、5月から支援開始となります。その後は、第1学期、第2学期の成績などを奨学生から報告してもらうという流れになっています。

予算については、一人当たり生活費として月 2,000 バーツ×12 ヶ月＝24,000 バーツ。勉強関連費が年間 6,000 バーツ。社会貢献活動費（ワークキャンプの手伝い、通訳など）が年間 5,000 バーツとし、合計 35,000 バーツ（約 105,000 円）が一年間の支援額になります。4年制大学で計算すると、18 人の子どもたちへの大学進学が可能となり、短大、専門学校など学業年数の違いによって、予算が余る場合は支援数を増加し、足りない場合はキャンヘルプタイランドの資金から補填することが可能です。

この新事業は 2011 年度から実施します。人材育成支援も含めた「すみれ基金」がスタートしますが、運営委員一同しっかりと取り組んで参りたいと思います。

～すみれ基金の発足に添えて～

久保とし子

平成21年7月17日、私の従妹のすみれちゃんが56歳で亡くなりました。彼女が残した遺書には、遺産を「慈善団体に寄付してほしい」と書かれていました。

四十九日が済み、いよいよ遺言の執行をどうするか考える時が来ました。当初から、私は、キャンヘルプタイランドに力になっていただけないかと考えていました。夫が退職後、ワークキャンプに参加をして4年が経ち、夫を通してキャンヘルプタイランドの活動内容を知るほど、深い信頼を持つようになっていたのです。

寄付をするにあたり、私には望みがありました。それが叶えられるものか、運営委員の大矢さんにご相談をしたことが「すみれ基金」のスタートです。

その前に、同じく遺言執行者である父方の従姉の関本利英ちゃんにキャンヘルプタイランドに基金を設立することを提案したところ、快諾を得る事ができ、二人の夢となって歩き出したのです。

私たちの望みは、一度きりの寄付で終わらせるのではなく、「基金」を発足し、「すみれ」と命名し、従妹が生きてきた証を少しでも残してあげたいということでした。

彼女の母親は医師でした。60年以上前に医師になったのですが、当時の日本は貧しく、従妹の母親の実家も、親の放蕩や戦争の影響で没落し、経済的に女の子どもを医学校へ行かせる余裕はありませんでした。当時は、優秀な学生を個人で支援する人がいたらしく、母親は、そういう人の支援で医学の道に進む事ができたのです。

そんな母親の元に生まれ育った従妹の遺志を生かすのは、最初は、医師を目指すタイの子どもたちのお手伝

いをと考えましたが、医師に限らず、社会に貢献できる仕事はたくさんある事をアドバイスしていただき、今回の形になりました。

生前、従妹が考えていたより素晴らしい形になったと確信しています。

それは、私たちの希望を全面的にくみ取って下さり、何度も前向きに検討をして下さった運営委員の皆様のお陰です。

また、タイの事情を考慮に入れて、今回の形に導いて下さったムさんにも心から感謝をしています。

これから、数年かけて社会へ巣立っていく子どもたちが、今度は、自分の力で支援の必要な子どもを支えていってくれば、「すみれ基金」は終わっても、未来へつながっていくものと思います。

お陰さまで、今年の7月の一周忌に、私たちは、すみれちゃんの墓前で「すみれ基金」の報告をすることができました。これから「すみれ基金」で育っていく子どもたちを、皆さまも一緒に見守って下さいましたら嬉しく思います。

関本 利英

もう、5-6年も前のことだろうか、ある夜、すみれちゃんから電話があった。

「最近、あまりよくないことが続いて落ち込んでいたんだけど、今日は、ちょっと嬉しいことがあったのよ。」電話の向こうの声は明るかった。聞けば、財団法人「日本動物愛護協会から、エッセイの募集があり、小さい頃の事を思い出して何となく応募をしたところ、選ばれた。」と言う。

その後、NHK出版から「君がいてよかった（犬がくれた40の物語）」というタイトルの本が店頭に並ぶことになった。

その本のプロローグに、審査委員長の椎名誠氏のコメントが寄せられ、彼女の作品にも触れられている。

犬はみんないいやつ 椎名 誠

以前『犬の系譜』という長編小説を書いた。子供の頃からいろんな犬を飼っていたのでその犬とのかかわりと自分の家族の歴史を綴ったものだ。我が家族につきあってくれた犬はいずれもそこらで拾ってきたいわゆる駄犬であったが、みんないいやつだった。

そう。犬は人間にとってみんないい友達「いいやつ」になってくれる。そうして子供には子供の感覚、子供の思慮に。大人には大人の感覚、大人の人生観に、それぞれなにかしらの大きな「力と意志。そしてやすらぎ」を与えてくれる。「犬と人間の友情の物語」が世界中で語られる所以だろう。

けれど「犬と人間」の物語で大変悲しいのは、犬の寿命が人間より確実に短い、ということだ。そこから「犬と人間の物語」にかなりの頻度で犬との死の別離による悲しみが語られる。友情が深いほど悲しみは深く、そしてその死が人間のその後の生き方に反映されていく。

この本に収録された四十編の「犬をめぐるエッセイ」の多くに犬の死が、そして犬を愛したヒトの死が語られている。ひとつひとつに真剣な思いと切々たる慈しみと悲しみ、それを踏まえた深い思索があって感銘する。その思いの深さでいえばどれも素晴らしい作品で、優劣などつけようがないのだが、私個人の独断で次にあげる五編に若干のコメントを加えさせていただくことにした。

「おじいさんわんこ」は五十年ほども前の一時期、筆者が親類のいる田舎で触れ合った老犬との、ほんの小さなエピソードを綴ったものである。けれどこのささやかな物語からは人間と犬の“命や心の触れ合い”を感じるのである。筆者が五十年近く経ってもこのことを忘れない、ということがその何よりのあかしだろう。淡々と書いているがその描写の向こうにもっと色濃いその時代の風景が浮かびあがってくる。短編小説の味わいのあるいい作品であった。

最優秀賞

おじいさんわんこ

関本すみれ

その犬は、二月の寒い夜、突然、私の前に現れた。昭和三十二年、五歳の私は、年明けから母方の祖父母に預けられていた。両親は、自宅も兼ねた小さな医院の開業を間近に控え、とても忙しくしていた時期で、私の面倒をみるゆとりがなかったためである。

祖母は、お手玉を作ったり、たくあんを芯にした海苔巻を丸かじりさせてくれたり、私が喜びそうなことを次々に考えだして、とてもかわいがってくれた。私も祖母が大好きだった。でも、それまで一度も両親、とりわけ母と離れたことのなかった甘ったれの一人っ子は、「おかあちゃん」が迎えに来てくれる日を待ちわびて、毎日、湿っぽい気分で過ごしていた。

その夜、祖父は留守で、祖母と私は早めの夕食を済ませたところだった。昭和三十年代初めの田舎のこと、ご飯を炊くのはかまど、洗い物をするのは外の井戸端でという暮らしだった。

祖母がお茶碗を洗いに出ていて、裏口が開いていたのだろう。ささっと軽い音が聞こえ、何かが入ってきた気配がしたので、障子を少し開けて覗いてみた。土間に、陽気な顔つきの茶色い犬が居て、愛想よく尻尾をふっていた。それまで、犬に触ったことは一度もなかったのに、そばへ寄る勇気はなかったけれど、この気立てのよさそうな犬をかまってみたくなった。そこで、手近にあった煮干しの缶から一掴み投げてやると、犬は土間に散らばった小魚を素早く食べ、尻尾をふって、私を見つめた。あまり嬉しそうにするので、もう一掴み投げてやったところに祖母が戻ってきた。犬は逃げもせず、煮干しを食べ終わると、しばらく私を見て、ふっと出ていった。祖母の話によると、あれは、五百メートルほど先の踏切を越えたところの牛乳屋さんの飼い犬で、時々この辺りを散歩しているという。「そやけど、家に入ってきたんは初めてや。すみれちゃんと遊びたかったんやろ。だいぶ年とってるみたいや。おじいさんわんこ、やな」。私は、「おじいさんわんこ」という呼び名が気に入った。

おじいさんわんこは次の夜もやって来た。私は嬉しくて、でも、まだそばに寄る度胸はなくて、縁側から煮干しを投げてやった。そこへ祖父が帰ってきた。祖父は、煮干しの缶を見ると恐い顔になり、大声で犬を追い払ってしまった。恨めしく思ったが、祖父が怒ったのも無理はない。缶の煮干しは、飼っている二十羽ほどの鶏に丈夫な卵を産ませるための大事な餌だったのだ。数は少なくとも卵は大事な収入源だった。

怒鳴られたから、もう来ないとあきらめていたのに、おじいさんわんこは翌日も現れた。ただし、祖父のいない昼間に。祖母と私は、かまどの焚き付け用の小枝を拾いに、近くの山へ出かけるところだった。

「あんたも行くか？」と声をかけて、歩き出すと、犬はついてきた。踏切のそばまで来た時、飼い主の家に帰るかなと思っていたら、犬は私と一緒に道を折れ、山道をのぼった。

おじいさんわんこに好かれてると、強く感じたのはこの時だった。そして、祖母が小枝を集めるのを待っている間に、私は初めて犬に触った。茶色の毛並みは少しごわごわしていた。背中を撫で、頭を撫で、顎の下に触った。犬は穏やかな表情で、じっとしていた。日溜まりみたいに温かい身体だった。帰り道、踏切で別れ、犬は自分の家に帰っていった。

翌朝、母が迎えに来て、私は両親の許に戻った。祖母は時々手紙をくれた。手紙によると、おじいさんわんこは、あれから何度か家を覗きに来たが、私がもういないと悟ったのか、やがて来なくなっらしい。「でも、元気に散歩してます」ということだった。それから祖母の手紙の結びは、いつも「おじいさんわんこは元気です」だった。ところが、秋の終りに届いた手紙にはこう書かれていた。「おじいさんわんこが死にました。踏切で電車にはねられたのです」

五十年近くも経つのに、一緒に過ごした時間はごくわずかなのに、おじいさんわんこは、ずっと私の心に寄り添ってきてくれた。浮かぶのは、冬木立ちの中で、少し傾きかけた冬の太陽を黙って眺めている、幼い

私とおじいさんわんこの後ろ姿。犬は私の肩を抱いている。永い年月の間に、私の心が創り上げたイメージなのかもしれない。けれど、生きるのがつらくなった時、この光景を思い浮かべると、心が温かく潤ってきて、立ち直ろうという気力が静かに湧いてくる。おじいさんわんことの思い出の底には、父母や祖父母が、幼い私に注いでくれた愛情が息づいているからだと思う。

「おじいさんわんこ」は、ただの犬ではなく、私が受けてきたたくさんの愛の象徴なのだ。

(愛知県名古屋市・51歳)

この作品の最後の数行から、彼女の人生を垣間見ることができる気がする。

恵まれない子どもたちに、ささやかでも愛情を注ぎたいという彼女の願いは、母方の従姉の久保とし子ちゃんの尽力で、キャンヘルプタイランドに寄贈することができることになり彼女の意思に沿うことができたこと確信している。

活動報告2

～奨学金資料翻訳会～

報告者 白柳 美穂

夏の奨学金授与式後、奨学生の申請書類と手紙の翻訳を行うため、7月～9月にかけて事務所で「翻訳会」を開催しました。名古屋近郊の翻訳ボランティアを始めとし、タイ人講師や留学生、そしてワークキャンプで通訳のお手伝いをしてくれた元奨学生のトン君も参加してくれて、ワークキャンプ参加者にとっては思いがけぬ嬉しい再会にもなったようです。



「7月翻訳会」



「8月翻訳会」



「9月翻訳会」

今年の翻訳会は盛況で、10名以上の参加を超える日もあり、全員が座ることができず分散して翻訳作業を行うこともありました。また、事務所では生きたタイ語が飛び交うため、まるでタイにいるような錯覚に陥ったりとタイ語を聞くチャンスは日常の中でなかなかないため、タイ語の学力向上のためや、人の役に立ちたいなど、参加者の皆さんの志に感動することも度々ありました。

翻訳会では、翻訳作業だけではなく交流時間も大切にしたいと思っていますので、参加者同士での情報交換、タイ文化など楽しく有意義な時間を過ごしていただけたらと思っています。

そして、翻訳ボランティアの皆様のおかげで、200枚以上を超える書類の翻訳も無事終わることが出来ました。この間には、全国から募った在宅のボランティアの方にも自宅でのあいている時間を使って翻訳のお手伝いをしていただき、本当に多くの方々に支えられていることを身を持って感じました。この場を借りてお礼申し上げます。

来年度も開催しますので、ご友人、知人などお誘い合わせの上、ぜひご参加下さい。

(※翻訳会での詳しい内容は、キャンヘルプタイランドのブログからもご覧いただけます)

キャンの翻訳会

湯浅 美晴

私は2008年の大学2年時にキャンのワークキャンプに参加しました。当時はただただ「ボランティアをしたい!」「国際協力を携わりたい!」という思いからの参加でした。ワークキャンプが終わり、私の中では「名古屋にはキャンという団体があって、タイにはキャンの奨学金のおかげで学校に行ける子たちがたくさんいて、その子たちは色々な夢を持っている」ということを誰かに伝えていきたい、また「その子たちに何か出来ること、ボランティア活動というのは続けなきゃ意味がない」ということを強く感じていました。

そんな時に、ワークキャンプの様子をこれから参加したいと思っている人たちにプレゼンテーションする場があったり、翻訳会に誘って頂いたりして、活動の幅が広がりました。

月一回の翻訳会は、タイ語と日本語が飛び交うとても楽しい場です。奨学生のプロフィールの中には、子供たちの写真や絵、絵画や作文の賞状が入っていることが多々あり、一人ひとりの家族や村の様子、性格まで知ることができます。またそれを共有し合うのが非常に楽しいです。これをきっかけに大学でタイ語の授業を受けており、3か月ほど前から講師のワライポーン先生にも翻訳会にご協力いただいています。タイ語をマスターするにはまだまだ努力が足りませんが、翻訳会や話題のタイ検定を通して、今すっかりタイに魅了されています。

＜奨学生からの手紙＞

奨学生からの手紙をご紹介します。今回はロイエット県の中学生からです。

2010年6月27日

奨学金プログラムの皆様、私にご支援下さった方、こんにちは。

お元気ですか。私は元気です。長らくお手紙を書いていませんでした。

私は、奨学金授与式の日に奨学金プログラムの方々にも会いたいですし、特に、私に奨学金をご支援して下さった方にお会いしたいです。私にご支援して下さった方には、ぜひお礼申し上げなくてはなりません。

私は、ドナー様へのご恩を忘れる日はありません。いつもドナー様方のことを思っております。私は、ドナー様の健康を願っております。今後、ドナー様は、健康で長生きし、ドナー様のご子孫や、私のような奨学生の菩提樹の傘となられることでしょう。

私は良い子になること、そして、お金は、勉学の為に有効に使うことを、お約束します。

ドナー様への敬愛と、尊敬の気持ちを込めて。

今日は、これでペンを置きます。ご支援して下さった方、また、お手紙書きます。

敬具

ロイエット中学2年 スワングスター シークム

2010年6月28日

ドナー様

僕は、奨学金を頂くことが出来て大変嬉しく思っています。僕は、日本人の方々から奨学金を頂けて嬉しいです。

今回、奨学金を頂いて、このお金を勉学のために最も有効に使うつもりです。このお金で学用品、例えば絵の具を買いたい。絵のコンテストがあれば、その時に使って提出したいです。それから、知識を得ることの出来る、勉強の本を買うときにも使いたい。この奨学金は、僕にとって大変有意義なものです。なぜなら、この先も、勉強を続けられる機会を与えてくれましたし、僕の家計をも助けてくれたからです。奨学金を頂いたからには、勉強に励み、奨学金を最も有意義に使うつもりです。

僕が奨学金を頂いたのは、これで2回目です。このことは、僕を勇気づけ、一生懸命勉強しようという意欲をわかれました。

僕は、タイの子どもたちの未来のために学業のご支援をしてくださる日本人の皆様の優しさに感謝しています。この手紙も、僕が奨学金を頂いたことに対する感動を伝えたくて書いています。僕は、皆さんが奨学金をあげたいと思っているタイの子どもがたくさんいる中で、自分が奨学金を頂けたことが嬉しいです。このことで、自分に誇りを持ちましたし、奨学金を使ってもっと勉強したいと思いました。僕はお金を大切に使います。よい人間になるように努め、奨学金をもらうにふさわしい人になりたいです。

最後に、日本人の皆様、奨学金プログラムの皆様が、ずっと幸福で、また、未永く繁栄されることを、お祈りいたします。

敬具

ロイエット県中学2年 タノンサック チンナシー

活動報告 3

～可児市手づくり絵本大賞 7年目の入賞～

報告者 大矢 治夫

今から8年ほど前、名古屋市内で「ブックフェア」が開催されました。会場の一隅に絵本のコーナーがあり、アンケートに答えると一冊の絵本が配られました。その絵本は「いいね いいね 君の橋」のタイトルで、第2回花の町可児・手づくり絵本大賞・大賞作品とあり、可児市発行とありました。創作絵本コンテストの最優秀作品の絵本でした。

当時キャンでは図書支援プログラムの事業として、日本の絵本をタイ語に翻訳してタイの子供たちにプレゼントする事業が活発で、古い絵本が事務所に相当数保管され、機会あるごとに絵本を集めていました。可児市のコンテストの事が解ったので、担当部署の可児市生涯センターへ出かけて、「いいね いいね きみの橋」の絵本をタイの子供たちに紹介したいので、提供して欲しい、とお願いしたところ、快く400冊提供くださいました。そして翌年から図書プログラムの活動として、創作絵本コンテストへの参加を、過去のワークキャンプ実施学校、奨学金支援学校などへ、ムさんを通して積極的に広報を実施して応募する運びとなったのです。

このコンテストは毎年作品テーマが変わります。2010年度のテーマは「虫」でした。過去のテーマには「足跡」「のりもの」「お弁当」「かばん」「ばら」「あな」などが記憶に残ります。

第4回大会から応募して途中3回ほど未応募期間がありました。

この2～3年、大人の応募者の作品にレベルの高い作品が寄せられていました。

今年の「虫」のテーマはタイの人たちにも理解しやすく、数多くの応募作品の内から4作品を応募しました。そして10月3日、絵本大賞事務局より「蝶ちゃんの光」作品が奨励賞の入選との報告を受けました。作者には賞金10,000円が贈呈されます。応募して7年目の快挙でした。

今年は全国。海外から400点余りの応募があったようです。全応募作品展覧会は11月6日～11月14日の間、可児市大見公民館「ゆとりピア」にて開催されます。作品展最終日には表彰式も行われます。ご都合よろしければ是非作品展においで下さい。

キャンの図書支援プログラムは2006年に事務所移転に伴い、絵本在庫の確保がスペース的に困難で、絵本を贈る活動は中止しています。

今回の入賞作品については、絵本にして、タイの子供たちにプレゼントすることも、図書支援の活動として検討したいです。会員の皆様のご支援お願い申し上げます。

第13回手作り絵本大賞・入選作品の情報

作者 ・文・絵 ヒヤナート・ナースワン(母)
カラシン県 カマラサイ郡 タンヤーパッタナウィット学校 美術教師
文 チャナチョン・ナースワン(息子)
カラシン県 カマラサイ郡 ピパラーバムルン学校 小学1年生



(蝶ちゃんの光)



(応募4作品)

連載

～石井さん（運営委員）のタイ検定とタイ豆知識 Vol.2～

タイ検定

「タイ好きな方」なら、多分ご存知かと思います。（或いは受験された方も…）第一回検定が8月29日（日）に、東京・名古屋・大阪・福岡の4会場で開催されました。主催はASEAN検定事務局（民間）で、タイ国政府観光庁の後援となっています。タイ検定となっていますが、（タイ語検定とは別）タイ語でなく出題・回答は全て日本語です。問題は「日常生活から・政治経済・観光（遺跡・史跡・祭り・ビーチ）文化」と広範囲に亘っています。100問題を4択マークシート方式で、持ち時間は90分と十分にあります。



（写真）タイ検定 HP より

第一回は3級ですから、タイに関心を持ち何度か「観光旅行」をされたり、現地に滞在経験があれば、合格ラインは100問中70問正解の70点以上ですので、簡単にとれる問題と思われる。タイの「雑学」なら「私に聞いて」と自認する私です。全問正解を目指します。最大の魅力は最高得点10名を「スペシャリスト」と称し該当者から3名を選び、タイ旅行をプレゼントするという企画です。出題は広範囲に亘るよう

試験データ

申し込み者数	3430名
受験者数	2977名
平均点	78.5点
最高点	97点

ですが、マア常識的問題なら「満点」可能と意気込んで申し込みました。但し苦手分野もあります。「文学・古典舞踊・若者スポット」です。それと加齢と共に「固有名詞」が、なかなか思い出せない事です。多分主催者は受験対象を、20～30歳代にしていると予想されます。タイ国の知識を広め、日本人の関心高めるのが目的です。（本心は観光客誘致が目的でしょうから）

検定の状況と結果

名古屋の会場は名古屋市立大学です。当日は最高気温に近い日なのに、飲食物の持ち込禁止となってます。と言われても熱中症になっては敵わないので、ペットボトルを持参しました。受験者は意外や意外「老若男女」と、他の試験では見られぬ構成です。受験者は400名程度いたでしょうか？ 因みに私は75歳で全国的に最高齢者の方です。マア半分「お遊び」の検定、何十年振りの試験ですが別に緊張するわけでもなく、後の予定もあるので、退席出来る45分以内に回答終了のつもりです。さて問題ですが、何とマア私の予想が的中しました。苦手な「文学」

全体（100%中）の各総合得点比率

得点	人数	比率	得点	人数	比率
95～	62	2.1%	45～	37	1.2%
90～	397	13.3%	40～	16	0.5%
85～	584	19.6%	35～	11	0.4%
80～	580	19.5%	30～	5	0.2%
75～	473	15.9%	25～	2	0.1%
70～	320	10.8%	20～	0	0.0%
65～	211	7.1%	15～	0	0.0%
60～	124	4.2%	10～	0	0.0%
55～	93	3.1%	5～	0	0.0%
50～	62	2.1%	0～	0	0.0%

<2009年度東南アジア文学賞受賞者の名前は>（知らない）そ

して「スポーツ」＜オリンピックで金メダルをとったボクシングの選手名は＞（名前忘れました）これを解る人は、多分居ないと思う問題「古典舞踊の装束」＜装束を付ける順番は＞2問です。これは「山勘」しか仕方がないでしょう。問題の見直しもせず45分で終了し回答紙を提出しました。後で思い返すと（問題集は持ち帰れません）どうも「勘違い」が3問あるような気がします。

この他チョットどうかな？と言った「面白い設問」もありました。（機会があれば思い出して記載します）そんな訳で、山勘当たれば97点～外れれば92点は取れたと思います。（何とか97点とりたいな）10月1日「合格通知」と「認定証」が、郵送されて来ました。これまた外れの方に予想的中しました。受験者2977名で、最高点が97点との事です。私は163位でした。（思ったより高得点者多いですね）最高点者は何名居るのかな？（1点差内に30人平均居るのですね。）次回2級が有れば、また挑戦しようと思います。「タイの豆知識」 皆さんお知りになりたいこと、事務局あてメール下さい。

タイ人気質 ใจคอคนไทย チャイコー・コンタイ

人は10人10色と言いますから、その国民性を一言で言い表すのは難しいでしょう。

タイ国民の性格を表す代表的言葉は、「ไม่เป็นไร」（マイペンライ）とされています。（注）直訳すると「マイ＝否定」「ペン＝状態～である」「ライ＝疑問詞」で、意識すると、「どんな状態でもない」となる。タイ人はこの言葉を「何でもない」「大丈夫・心配ない」「気にしない」等と、その場面・状況に応じて良く使います。例えば「自分が過ちを犯した場合」日本人ならどうするでしょう。先ず「済みません」と誤りを認め、叱責を受けて「反省」するでしょう。タイ人は謝るところか、「マイペンライ」ですませます。初めてタイ人と接する日本人は、唾然とし怒り心頭となります。謝りもせず「何でもない」「気にしない」とは、何と言う態度だと日本人なら誰しも思うでしょう。

この言葉の意味は外国人にはなかなか理解が難しく、タイ人と長年生活を共にしないと、正しい理解は出来ません。本当に意味するものよりも、事にあたって「何でもない」「いい加減」な国民性と大方の外国人は理解しているようです。（この説明には、相当な紙面が必要です。）ここでは、その根幹の一部について書いてみましょう。

タイ人の人生観

タイ人共通の「人生観」は、心身ともに生活する上で、最も大切に考え・行動の基本は何かと言いますと（สำคัญ サムカン＝重要）重要なキーワードが3つあります。

それは下記ワードの頭文字「ส=ソー・スア（虎のソー）」の3ソーです。

- ①「サバーイ」 สบาย = 心地良い・快適・健康な・心配のない状態です。
- ②「サヌツ（ク）」 สนุก = 楽しい・愉快であることです。「สนุกสนาม」（楽しくて心地良い）
- ③「サドゥアツ（ク）」 สะดวก = 便利な・自分に都合のよい状態です。

3つの「ส」が満たされる状態（それも将来でなく）毎日「安楽に暮らす」ことが最大の関心事です。そしてこれらは、意識的に積極的にこの状態を、作り出す努力よりも自然に「与えられる」事を好み、常に平静な心「เฉยๆ」（チュイ・チュイ）を保つことを心がけて暮らします。この人生観が、タイ人のあらゆる行動パターンとなっています。特に日本人のように「厳しさ」を求め「管理社会」に所属する人間が多くを占める国民にとっては、慣れるに従って「イライラ」感が収まり、むしろ「スローライフ」が、魅力になってくるのです。（これを超えられない人は、タイに適應しない）外国人にはこの人生観が、具現化して「微笑」「ゆるやか」「柔軟」な国民と評される所以でしょう。農耕民族の日本人も60～70年前は、同じような生活環境の様な気がします。

運営委員 石井 満

お知らせ

～2011年3月ワークキャンプ予告～

2011年3月にタイ北部チェンマイ県ドイサケット郡「カサロンの家」（山岳部少数民族の子どもたちのための学生寮）で、ワークキャンプを行います。今回は水不足解消のためコンクリート製水タンクの建設を行います。また、電力不足を補うため発電機かソーラーシステムの寄付も行いたいと思います。

キャンプの詳細な日程はまだ確定していませんが、3月中旬から下旬の1週間ほどを予定しています。参加費は、現地での滞在費・移動費・食費、運営経費、寄付金等を含め5万円程度（航空券は含まない）の予定です。チェンマイまでの往復航空券は別途必要ですので、ご自分で手配していただくことになりますが、キャンヘルプタイランドでも航空券手配のお手伝いをいたします。

タイの子どもたちと一緒に生活しながら、現地の様子や現状を肌で感じることのできるキャンプです。興味のある方は事務局までご連絡ください。詳細が決定次第、詳しい資料をお送りいたします。キャンヘルプタイランドブログでも情報を発信していきますのでそちらも合わせてご覧ください。

運営委員会

(2010年8月～2010年10月)

活動	月日	場所	内容
運営委員会	8月28日	事務所	すみれ基金について
運営委員会	9月25日	事務所	すみれ基金について、ワールドコロボについて
運営委員会	10月30日	事務所	3月ワークキャンプについて

運営委員募集中！

一緒にキャンヘルプタイランドの運営に参加してみませんか？

通常は毎月第4土曜日に事務所に集まり、会の運営について話し合っています。見学でも結構ですので是非事務所へ遊びに来てください。

次回の運営委員会は 11月27日(土) 13:00～ (事務所にて) です。

編集後記

▼石井運営委員からの報告にもありました「タイ検定」僕も受けてみました。大学の教室を使った試験会場には400名余りのタイ好きが集まり、中には「I LOVE BKK (Bangkok)」と胸に書かれたTシャツを着てくる人も…。教室では皆さん熱心にテキストを読み、試験開始の直前まで猛勉強をしていました。顔見知りは何人もいるのだからと期待してキョロキョロしましたが、知り合いは石井さんともう一人だけ。名古屋でキャンヘルプに係わり15年になりますが、僕の知らない「タイ好き」はまだまだ沢山いらっしゃるのですね。

そして、試験結果は…。

坂

<キャンヘルプタイランドネットワーク通信 Vol.51>

発行 キャンヘルプタイランド

発行人 西川 弘達

編集人 坂 茂樹

発行日 2010年10月23日

住所 〒450-0003

名古屋市中村区名駅南2-11-43

NPOステーション内

Tel & fax 052-566-5131

(OPEN: 毎週火、木・土曜の13～16時頃)

E-mail: canhelp@npo-jp.net

ホームページ: <http://www.canhelp.npo-jp.net>